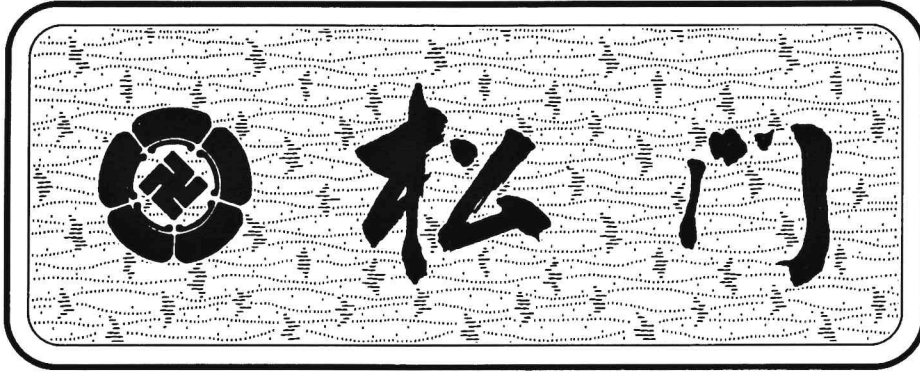


- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL 083(922)1218



二十一世紀を迎えて

財団法人松風会理事長

松 永 祥 甫



二十一世紀初めの建国記念の日の朝は雲も風もなく、今年初めての好天に恵まれ、陽射しは柔らかく、萌え出るものに春の息吹きを感じ、期待で胸が膨らんできました。これからの百年間、地球上の自然も世界の人々も共に総べて本来の特性を生かして互いに相和して、繁栄と幸せ一杯、そういう世紀でありたいと願い、そうしなければと言う使命感が脳裏に閃いて参りました。

イギリスの歴史家、国際政治学者、文明批評家として有名なアーノルド・J・トインビー氏（一八八九―一九七五）は一九七四年著書「二十一世紀への対話」の中で「日本人はセンセイショナルな成功を収めている。技術は人間の事象の一部、人間は心身相関の生命機能体であるが、私はその物質的要素よりも精神的要素の方がより重要だと信じる。今後日本の寄与できる道は民族独自の創造性、他文化との融和的精神において諸民族の二本となり得ることである。そう見ている所以は、日本人は精神的資産を持っている。日本の伝統的宗教は仏教であれ、神道であれ、何れも人間と自然との調和が人倫の道である」と喝破し「欧米文明の急激な撰取による混乱が、次の同化創造への移行をやむなくする」とも述べておられます。私はこれらの言葉は日本国民に対する極めて適切



故 熊野隆治先生

な警告と想っています。今日、日々報道に見る青少年犯罪の悪質化、低年齢化、多発化、また社会のあらゆる階層に亘っての醜聞、汚職、犯罪、また教育界の無気力など將に国の盛衰にかかる危機に際会していると申して過言ではないと信じます。如何に対処すべきか、決して傍観を許される時ではありません。幸い、真に国の危急存亡の秋に際会し、一身を抛って憂国の至情に徹し、至誠留魂の信念と行動を以って明治維新回天の事業を成功へと導かれた第一人者吉田松陰先生を学ぶに如くは無く、今絶好の機会到来と思う次第であります。その筋道としては是非紹介させていたいただきたい点に触れさせていただきます。

当松風会は昭和三十六年山口大学生を対象として、学生生活の中で松陰精神を体得する機会を得させる目的を以って設立された松風寮の経営を濫觴とし、これを継承して昭和四十九年に改組して専ら松陰精神頌揚に微力を尽している財団組織体であります。昭和三十年代の時代を洞察し炯眼をもつて松風寮を設立された功績者熊野隆治先生に焦点を当ててみます。

熊野隆治（観風）先生（一八八二―一九七五）は教育者、社会事業家として本県で不朽の足跡を残されておりますが、松陰先生敬慕者としても第一人者であります。昭和三十四年松陰先生殉難百年を記念して、記念式典及び松陰先生百年祭が盛大に挙行されていますが、その百年祭記念事業準備会設置当時から中心的存在として活躍されております。そして松風寮はその記念事業の主たるもので、松下村塾の故知にない、松陰精神にあやからせたいの一念に発起されたものであります。私は当時県学事広報課長でありましたので、県費補助その他で直接若干お手伝いをさせていたいただいています。

熊野先生は明治十五年、大津郡俵山（長門市）に出生、明治三十六年山口師範学校卒業後直ちに教職に就かれ、しかも翌年には小学校校長を拝命、次いで倫理学文検に合格、明治四十四年には師範学校教

論、郡・県の視学、県社会課長、県立育成中学校長、大阪府立修徳学院院长、国立武蔵野学院院长を務め昭和二十一年退官となつています。昭和十四年には著書「みかえりの塔」を發表、社会事業文獻賞を得ておられます。天資英邁、堅忍不拔、豪気堂々、熟慮断行の志士の気概の優れた人物でありました。

松風寮十四年間の在籍者総人数は約六百名で、今日経済界、教育界で活躍、社会的貢献度は高いと聞き及んでいます。山口大学が平川に移転したことから、松風寮土地が県庁入口道路となつて、松風寮は閉鎖となり、符節を合わせたように県教育会館が建設され、その一角で現行の事業開始となつた次第であります。

さて、私は人生観の一つとして、現在は過去の集積であり、未来は過去、現在を見通した線上において諸種の要因を得て展開していくものと考へております。こうした見地に立つてここで二つの提案をいたします。

今日の世界情勢として人知即ち科学技術は今後も限りなく進展して参ります。これを自己の欲望手段に充てる限り、他に対し、如何程の害毒を流すことになるか計り知れ

ません。心の置き所、倫理道徳を基調として科学知識を身に付ける、その機運が醸成されるのが先ず第一であります。その次の対応策としては既設の民間団体、例えば松風会では一層具体的事業を展開して行く、国・地方団体自身腹を決めて事業実施に当たるか、あるいは民間団体に支援の手を差し伸べる。国を挙げたのこのような方策が採られない限り、大層恐るべき社会に陥つて行く事を恐れる一人であります。

本会におきましては、関心をもちたれる方に広く呼びかけて、これまでの松陰精神の理解と実践に取り組みます。また平成七年に発行した「吉田松陰撰集」を改訂再発行して、意識の昂揚に資したいと考へております。

すべての人々が心の大切さを意識し、これを基調として科学技術の進展が図られる時、真に期待される二十一世紀が実現されるのではありますまいか。

第四回松陰研修塾基礎コース開講

平成十二年度一回・二回報告

- 平成十二年度日程
- 第一回 八月二十六日(土) 開講行事
 - 第二回 十月二十八日(土)
 - 第三回 一月二十七日(土)

開講行事

主催者あいさつ
松風会理事長 松永 祥甫

平成十二年度の松陰研修塾基礎講座を開講します。今年は大変暑い年で、また益が過ぎてから暑さが厳しい毎日です。暑いときではありますすが、県教育庁指導課山根教育指導監、県中学校長会常任幹事藤野先生を来賓にお招きをし研修参加者多数御出席のもとに開講できますことを厚くお礼を申し上げます。

さて今日、社会の著しい特色としてテクノロジーマたIT革命ということが常に新聞等に出ております。今日はまさにこうしたIT革命時代です。したがって知的・科学面



については著しい進歩の時代ですが、人間としての幸福、安全な生活面から見ると今まがかつて経験をしたことのないような非常な不安が充満しています。私は「世は末」と申しますか末法と言うようなことを思います。これは青年のみならず成人者にも共通しております大変嘆かわしいと思つております。これは結局モラル即ち倫理道徳の欠如によることが大変多いのではないかと思つております。書店の店頭を見ましても倫理道徳とは書いてありませんがモラルという表現でこれを重視しています。しかし倫理道徳の面を表面に出してはな

なか共感を得ることができないという時代でもあります。見方によりますと今日の日本の社会は危急存亡の秋というような感じがいたします。そういう危機感を誰ももっていませんが、先人に学ぶ、歴史に学ぶというようなことからするとかなり明るい面も見出すことができます。

吉田松陰先生は生涯の何れの面をとつても私たちの鑑でありお手本になることをつくづく感じています。

当松風会は松陰先生を崇敬し松陰先生に学ぶ、すなわち研究研修を事業目的とする財団法人であり、昭和四十九年に設立しこの事業を展開して今日に至つています。そのうち先生の生涯について学識御造詣の深い先生の講義を主とする基礎研修コースと自ら先生の足跡について研究して指導者の指導を受ける自主研修コース二つのコースがありますが、前者が本日の研修塾基礎コースであります。

本日は指導者として松陰研究の第一人者である河村太市先生、及び石原啓司先生をお迎えして研修できることはありがたい限りであります。今日の参加者の中ですでに基礎コースを履修されている方が数名あります。おそらく

松陰先生について学ぶことは何度繰り返してみても、いわゆる汲めども汲めども尽きないという言葉と同じように常に新鮮な心をもつて取り組める、そういう御心情ではないかと思えます。私もその一人であります。人間はその環境環境においてその出会いのなかでどうしたらよいか松陰先生に学ぶものがたくさんあります。

ともあれ、松陰先生に学ぶことはモラルの体得実践に無限の力となるものであります。特に大部分の方が教育に携わられており、また教育に関心のある方ばかりであります。暑いときにふるって御参り上げたことに感謝を申し上げると共に皆様の御活躍を祈念します。

来賓祝辞

教育庁指導課教育指導監

山根 和夫

先生方おはようございます。第四次松陰研修塾基礎コースが開催されるに当たり一言お祝いを申し上げます。本研修に御参加の皆様方には、平素から山口県教育充実のために多大なる御尽力をいただいた



ていることに対して、先ずもって心から感謝を申し上げます。

また皆様方には日々の教育活動に御多忙の中、自ら二年間の研修に取り組まれようとしておられることに対して深く敬意を表する次第であります。

さて二十一世紀を目前に控え、ここ数年中央教育審議会の答申を中核にいたしまして、教育改革を迫る提言が相次いで出されております。これらによりまして、これからの教育はゆとりの中で生きる力を育むことを目指すと共に、個性を尊重した教育を展開する方向付けがなされております。これは御案内のとおりであります。また、本年度から新しい学習指導要領の移行期間に入りまして、これに沿った教育をできるだけ早く、学校で具現化することが期待されているところであります。こう

したことから、県教委といましては、山口県教育ビジョンの基本目標に「夢と知恵を育む教育の推進」を掲げまして、子供一人一人の個性のさらなる伸長と豊かな人間性や社会性の育成を目指して、時代の要請や実状を踏まえた教育改革を積極的に進めているところでございます。

この基本目標実現のためには、本県教育のよき伝統でありますところの豊かな先見性、あるいは進取の気質、また、郷土を愛し郷土に奉仕する精神などを今日の教育に生かして、山口県らしい教育の具現化を図ることが重要であると考えております。

財団法人松風会におかれましては、松陰先生の遺墨と精神の普及を図り、それを現在に生かすという理念のもとに、幅広く、かつ伝統的に活動をされておりますことは誠に意義深いものがあります。



て、活動の成果に心から期待を寄せているところであります。折しも、ミレニアムという世紀の転換期にありまして、政治経済等の改革と共に、教育界においても大きな変革が求められております。今日、幕末から明治維新へという新しい時代を切り拓く先鞭をつけられた松陰先生の遺墨等を研修会において学ばれることは、現在の教育課題を解決するに当たっても大変有意義であるに当たつても大変有意義であります。本県教育の充実にも大いに寄与していただくものであると考えております。本会の一層の御発展を期待いたしますと共に、塾生の皆様方が御健勝にて御研鑽をされますことと、今後のますますの御活躍を祈念いたしまして御挨拶いたします。

山口県中学校長会常任幹事

藤野 真砂雄

おはようございます。会長に代わりまして御挨拶を申し上げます。

夏休みもあとわずかになり、各学校において諸行事の忙しい中、この時期が一番休めるときですが松陰研修塾基礎コースの研修に県下各地から先生方が集まれ、二学期に渡って人間松陰に学び、教

育を見直す基礎的研修が組織的継続的に行われることは、他県には例がなく本県の誇りであると思っております。

このような背骨の入ったしかも未来性先見性のある研修事業を企画運営しておられる松風会に対しまして、小中高の校長会を代表しまして厚くお礼を申し上げます。

また皆様方は、この研修会を生涯に渡つての研修課題として取り組み、松陰先生を人間の生き方の指標としていかれようとされていることに深く敬意を表するものであります。

私たち山口県の教育に携わる者として、二十一世紀を担う子供たちに松陰先生をどのように伝えていくかは、大きな命題であり使命であります。

ある小学校の先生のささやかな試みの例を紹介いたします。

六年生に「松陰のことばを学ぶ」という授業を実践しておられます。松陰撰集の中から自分にとって好きな言葉は子供にとっても好きな言葉であるという身勝手な判断基準で、十のことばを選択し、子供と共に何度も何度も声を出して朗唱しその意味の説明をするというきわめてシンプルで押し付けがましい授業であ

ったようでありませんが、しかし授業後の子供の感想から強く思ったことは、松陰の言葉は子供の感性にぴったりでよく波長が合うということです。ったようでございます。



例えば

「松陰本人の気持が一言一言に現れていてすごい」

「短い言葉で表されているがとても深い意味があります」

「何か松陰先生の強い思いが胸の中に伝わったような気持ちでした」

というようなことが子供たちから寄せられた感想であったようです。

本県では、新しい教育ビジョンが策定され、松陰精神はその根幹をなすものであり、我々が二十一世紀に受け継ぎ、語り継ぎ、育んでいかなければならない山口県はもとより日本の精神的遺産であると考えます。

二十一世紀を生き抜く子供

たちの心に、松陰先生がいかに生きて働くか、その方途を皆さんの研修の中で探っていただいて、山口県教育の新しい二十一世紀の子供たちをいかに松陰精神の基に導いていくか、また二十一世紀を生き抜く力を、たくましく生きる力をつけていくかを研修していただきたいと思います。

本研修塾のますますの発展と会員の皆様の今後の御活躍を祈念して、お祝いの言葉といたします。

研修報告 講義要旨

「吉田松陰の生涯」

松風会理事 石原 啓司

はじめに

一七〇年前に誕生し、僅か三〇年足らずの生涯で亡くなったその青年がどうして現在もこうして読まれていのか。また教育の現場で語られているが、何を学ぶのか。

松陰先生を学習するには「松陰全集十巻」があるがこれを最初から読むと言うことは大変な苦勞がある。しかも、中国語の古典を徹底的に勉強

した人だから、その引用文が文章の至る所に出るので、大きな研究の制約になっていく。みなさんはこれから二年間の学習だからテーマを決めて取り組むのがよい。

学習には「松陰全集」が基本だが、松風会が出版している「松陰撰集」を参考にするとよい。一人の人物史を学習する条件としては、その人の持つて生まれた資質、性格（性格は社会的な努力によって変わる）、形質（変わりにくい）を調べる。

またどういう環境にあったか、家族構成が大きな役割を持つていいる。杉家が大きな影響を及ぼしている。生まれた萩の町、本人がどういいう教育を受けたかということも関わりのある。五歳くらいから徹底した暗唱主義（頭から覚えこませること、口に出して読むこと、これは日本の伝統、古典の暗唱は大事）の教育を受けた。現在は覚えさせることをあまりやらないが大切だと思ふ。

どういいう時代であったかと言うことも大きい。天保元年（一八三〇）に生まれている。江戸時代では幕末であること。十九歳までは明倫館で家学の山鹿流の兵学をやるが、大きな転機は嘉永三年（一八

五〇）、画期的な動きをはじめるのは安政五年（一八五八）、幕末激動の十五年間の中でまっしぐらに生きていた。処刑された九年後には明治維新になっていいる。

松陰の書いたものは幕末という時代と切り離しては考えられない。幕末史を頭に入れてながら松陰を学ぶ必要がある。どのような行動をしたのか、行動については松陰は多くの文章を書いている。人が一生かかっても書けないような膨大な量である。その時代でどのような発言をし、それがどのような影響を与えているかを見ることが。松陰の人間像を理解するためにはこのような作業が必要である。このようにして松陰に近づいていくことができる。

一 生い立ち
天保元年（一八三〇年）誕生、誕生地には現在建物はないが、当時の間取りが示されている。小さい家と言う分けではないが、松陰が子どもの頃には、多くの家族が同居していた。祖母（名前、ひさ、川上の出身、松陰は杉家ではこの祖母の影響が大きいと述べている）父は百合之助、母親は滝父の兄弟の吉田大助、玉木文之進（松陰の幼児教育に当たる）、祖母の妹、兄の

梅太郎、妹（千代、寿、文）も三人が一緒に住んでいた。この家族の関係を松陰は書き残している。
杉家は向学勤勉で、尊皇家である。父は「盗賊改め方」をしていいた。これは今の警察署長である。（途中略）
玉木文之進（明倫館の秀才、代官をも勤める）は民政は民への真心がすべてであると言っている。松陰はこの叔父から厳しい教育を受けた。しかし生涯この叔父を尊敬している。叔父の真心の故である。

二 杉家の家法
松陰に関わる書簡（約六三〇通）が多く残っている。
杉家の家法について妹千代あての書簡（安政元年）に出てくる。これから松陰の優しい気性がよくわかる。松陰は



徹夜でこの手紙を書いてい
る。厳しい教育を受けて厳し
く生きた人だが、本音はやさ
しい人であった。親しい、兄
弟思い、優しさで厳しさは同
居できる。

松陰はまた日記を沢山残し
ている。九州遊学の「西遊日
記」には常に家族のことを書
いている。夢のことまで詳し
く書いている。松陰の人間像
を調べようとすればそれだけ
でも資料となる。

「家法に及びがたき美事あり、
第一に先祖を尊び給い、第二
に神明を崇め給い、第三に親
族を睦まじく給い、第四に文
学を好み給い、第五に仏法に
惑い給わず、第六に田島のこ
とを親らし給うの類なり・・
・」杉家の家法を六つあげ
ている。

最後の五行目、これがよく
引用される。「文学を好み」こ
れは小説ではなく、学問のこ
と。「仏法に惑わない」家は
神道だが母は仏教信者だ。こ
れは現世から逃げ出さないこ
との意である。父は少し几帳
面すぎる面があり、毎朝藩主
の墓へお参りをするのが日課
であった。途中で人に出会う
と帰って水浴びをして、着替
えて出直すと言う人であった。

三 松陰の学習法(遊歴)

松陰は嘉永三年(一八五〇)

から本格的に勉強した。場所
は平戸・長崎・江戸などであ
る。江戸は二回行っている。
松陰を知るには日記、次に書
簡がある。代表的な著作は
「講孟余話」数々の「書簡類」
である。



「松陰全集」では七・八巻
に掲載されている。これらを
読むにはその背景が大事だか
ら、常に年表を横に置いてお
く必要がある。例えば安政五
年正月に松陰が松下村塾につ
いて言っているが、幽室文庫の
トップに「岡田耕作に示す」と
いうのがある。この中に「松
下村塾の第一義は」というの
が出てくる。これには「地域
の俗礼を一洗し、矛を枕に
し・・・」いわゆる油断せず
常に戦闘準備を怠らないよう
にと言っている。(途中略)

松下村塾の教育は人格形成

だけでなく時勢に合った教育
であった。スローガンを掲げ
て歴史の改革が行われたのは
はじめてである。戦国時代に
はスローガンのようなものは
なかった。尊王論といっても
様々であった。

九州遊学から帰り、嘉永四
年(一八五二)に、江戸の藩
邸に有備館を作り、江戸の有
名な学者を招いての学習会が
行われた。

松陰は本をただ読むだけで
なく、書き写す、注釈をつけ
る。松陰は「読書は半分手
でやれ」と言っている。読んで
は写し、写しては読む、書く
から余計に記憶に残る。この
繰り返しである。松陰は大変
記憶力がよく、野山獄に入っ
て丁度一年が経過した日に
「回顧録」を書いている。

先日テレビの「黒潮電撃隊、
松陰の跡を追って」という番
組をみた。松陰がペリーを暗
殺しに船に乗り込んだと言う
説である。この説については、
しっかりした基本資料がある
のだろうか。なくては意味が
ない。宮部鼎三などが直筆で
書いたものであれば間違いな
いだろう。

松陰の生涯のモットーは「人
より優れたことなし・・・」
と。平素から人に言えないよ
うなことをしたことはない

と。自分の行動についてはす
べて人に語れると。松陰が書
いている膨大な資料が全部嘘
であるかということになる。
当時攘夷と言う考え方は全て
の武士が持っている考えであ
り、何かの弾みで言ったかも
知れない。久坂がハリスを切
ろうと思うと言ったとき松陰
はやめとけと言ってる。幕末
の非常事態の中で生きて来た
人たちは、切ったり切られた
り、そんな話は日常的にあっ
てもおかしくない。(略)

「誰一人反論をしないので
私の説は認められたものと思
う」と言ってるが学者として
はあるまじき言動である。謙
虚さが足りないと思う。

「投夷書」三月二十七日
夜記」をよく読むこと。

四 教育者としての松陰

松陰は、安政元年(一八五
四)十月廿四日から野山獄に
一年二ヶ月いた。野山獄は処
罰というより借牢願で入れら
れていたのだから、刑期はな
い。「家ではとても管理でき
ないので守をしてください」
と言うかたちで。だから、食
事は家族もち、その代わり差
し入れ自由、酒が入ってくる
ので空気が悪いと松陰は言っ
てる。入牢者は誰も自暴自棄
となっていた。松陰は、お互
いに得意なことを指導しあう

活動を始め、その活動をして
いく中で皆変わってきた。こ
れが松陰教育の原点である。
彼が単なる明倫館の兵学者、
書斎の学者であれば、今のよ
うに名前は残らなかつただろ
う。

この野山獄の成果が「福堂
策」である。「人間一人一人
素晴らしいものを持っている
のでそれをもとにまとめてい
けば必ず人間は完成する。だ
から人間を捨ててはならな
い。」野山獄の囚人は、もと
もと教育を受けた人ばかりで
ある。「藩政は人に生きがい
を感じさせること、そして自
ら体験させること。」と。

杉家に帰ってから松陰は皆
を獄から出すよう釈放運動を
している。その結果釈放され
た時は、自分が出獄をしたと
きよりもはるかに嬉しかった
ようである。

松陰はかわいそうだからと
いうような考えでなく、志を
同じくする人間として、横一
線で見える見方である。(略)

松陰研究は明治は徳富蘇峰
の「吉田松陰」(岩波文庫)が
最初で、戦前の名著は玖村先
生の「吉田松陰」、玖村先生は
「松陰全集」編集に携わって
おられる。戦後は岩波の「松
陰全集」である。河上徹太郎
の「吉田松陰」も名著である。

松陰は嘉永三年(一八五〇)

松陰を理解する場合、山鹿流兵学のことがある。松陰を学習するのであれば、「山鹿素行」を是非勉強する必要がある。

「今あらためて松陰に学ぶもの(志を育てる教育)」

山口県立大学名誉教授

県教育会会長

松風会理事 河村 太市

はじめに

松陰は今日までいろいろなとらえ方がなされてきた。

徳富蘇峰が最初に松陰を書いた明治二十六年には、松陰を革命家としてとりあげている。明治政府の関係者に山口県出身が多いということ、特に乃木希典あたりは革命家としてとらえることに反対している。明治四十一年の二版では革命家松陰は姿を消している。以後松陰は教育者とかヒューマニストと捉えられている。松陰の業績を考えた場合教育者松陰の業績は実に大きいものがある。

野山獄のように獄の中を学習の場としたことは、世界の教育史に例を見ないことである。松陰から教育者松陰を抜きにして語ることはできない

い。今回は主として教育に視点を当てる。松陰を学ぶ姿勢は、次の松陰の言葉の通りである。「書は古なり、為は今なり、今と古と同じからず」これは「諸生に示す」の中にある。どんなに立派な本でも本は古

平成 13 年 6 月



くなる、松陰が書いたものでもその時代に松陰が言っていることであって、今の時代ではないこと、松陰を勉強するにしても昔に書かれたものであることを理解しておくこと。

「経書を読むの第一義は、聖賢に洵らぬこと要なり」これは『講孟余話』にてくるが、経書は聖人が書いたものだが孔子だから孟子だからと言っている。

一 人生と志

志を育てることが教育の根

本と考える。今日進路指導は、就職や進学を考えるがそれだけでなく、志を育てるための援助をしてやるのが大切である。

松陰の生涯は、志を立て、志に生き、志を伝えたものであった。

松陰は五歳のとき叔父(吉田大助)の家へ養子に行く。叔父は父(百合之助)のすぐ弟で吉田家は山鹿流兵学を教授する家である。松陰は明倫館の教授になり、兵学を指導すると志をもつようになる、途中には松下村塾の指導があつたりするが、最後には「留魂録」を書き門弟たちに自分の精神を伝えていく。

人生は自ら開いていくものである。「志を立てて以って万事の源と為す(士規七則)」武士としての生活心情が書かれていく。「三端」というのは七に到達するのに(三に縮めたのではなく)次の三つをやるのが大切と言う意味である。

中国、明の時代の遠了凡という人の「陰隲録」と言う本がある。

彼が若いときに科挙(官吏登用試験)を受験しようと思つた。家が貧しかったこともあり、そのために人生の計画を自分なりに立てて努力する

と大体そのようになった。自分から努力するのではなくそのレールの上を歩いただけであつたと。運命は命を運ぶと書く、宿命はどうにもならないきつたこと、人間は運命のもとに生きる、だから運ぶ努力をしなければいけない。人生は自分で切り開いていくことが大切である。

マズローは人間の欲望を階層化して説明している。生理的な欲求、その上が安全の欲求、次が所属の欲求、承認の欲求、最後に自己実現の欲求と層をなしている。最終的には自己実現の欲求となっていく。松陰はこの持ち味を真骨頭(真骨頂)という。個性というのもこれである。

人生を開いていくには誠、志、気が不可欠である。松陰の誠は「其の源に遡りて言うに、人唯一誠あり、以つて父に事ふれば孝、君に事ふれば忠、友に交われば信、此の類千百、名を異にすれども、畢竟一誠なり」あるのは誠だけ、これは親に仕えることと誠がはたらけば孝である。主君とのかかわりに誠がはたらいたものが忠である、誠が友達との間にはたらいたとき信である。対象により誠は変わるものである。誠はあらゆる方向へ働く。すべての

方向、方向を与えるのが志である。志は之の意味、心が行くことである。誠と志だけでよいのか。

「松村文祥を送る序」(松陰撰集六五頁)に「夫れ志の在る所、氣も亦従ふ。志気の在る所、遠くして至るべからざるなく、難くして為すべからざるもなし」つまり志の在る所に気が従うというのは、気は東洋医学では気や壺の医学の意味もあるが、精神的エネルギーと私は言っている。志が強ければ強いほど気が働くということ。志が気を引っ張っていく。(志は気の帥なり)この誠、気、志が一つになった状態を至誠と私は考える。

「仁は人の心なり、義は人の路なり(孟子)」仁は心のありよう、義は人の路、自分の行いが義にかなっているかどうかという言い方をする。辞書では義は羊(価値)と自分(我)とある。義は我を価値あらしめる。路にかなった生き方をすれば、これが義にかなったのである。義にかなうことは我を価値あらしめることである。松陰は字名を義卿、あるいは子義と言っている。

二 志を育てる教育を実践するために

(一) 真骨頭の洞察
「君の真骨頭はこれだから

こういう方向へ行くのがよいのではないか、そのためにはこうしたらどうだろう」このようなことが教育である。文字を一つ余計に覚えるとか、理屈を一つ言えるようにするのが教育ではない。人生の方向を支援するのが教育である。教育は進路指導が本質ではないか。

「人賢愚ありと雖も、一、二の才能なきはなし、湊合(あつまる)して大成するときは必ず全備する所あらん、是れ亦年来人を閲して実験する所なり。人物を棄遺せざるの要術、是れより外復たあることなし」

どんな子供もいいことの一つや二つは持っている。これを大切にやらねばいけない。人間を生かすには、その人の個性のよさを見出し、認めてやるよりほかにはない。

(二) 教育と出会い

子供と教師は出会いである。出会いは顔を合わせるだけではない。教育的には心と心のふれあいが大切である。

教育の世界には能率とは別の原理が働いているのではないか。園児の持参した花束をただ「ありがとう」とだけいって花瓶に生けた。この先生は朝の多忙な時間を能率的にこなしているが子供とのそこ

に心の通いがあつたであろうか。岩橋文吉編『教師の心を育てる』

教師は喜びの経験を持つことが大切だと思う。喜びの経験をもつ教師は更に立派に育つと思っている。

松陰に「煙管を折るの記」がある。みんなが煙草を止めると言つて、煙管を折つたこと。これによつて、松陰はこのことを「謹んで記す」と書いてある。この気持ちになることは素晴らしいことである。

安政元年三月二十七日のこと(出国事件)を回顧したのが「回顧録」である。自首をし、とらえられ江戸に送られる。三島の宿で松陰は牢番の青年に語りかける。青年はよく聞いてくれた。松陰は「我が生来の喜び」といつてる。

(三) 待つ教育

待つ教育の大切さを言つている。松陰は、朱子の「孟子集註」(松陰撰集三〇四頁)で読んでいるが、その中の朱子の言葉であるが、「涵育薫陶して其の自ずから化するを俟つ」と。涵は浸すこと、薫はかおり、陶は固めること、したがつて、あらゆる努力をしてそのあとは(子供)が自分で変わるのを待つしかない、人間は周りの者が出る

だけの努力をしたあとは本人が努力してよい方向に変わるほかにない。孟子の中に助長ということにふれたところがある。無理な助長はよくないといふのである。「自ら松柳の詩の後に書す」(撰集三〇四頁)これは松と柳、柳は早く伸びるけれど風が吹けば折れるが、松はなかなか伸びないが、風雪に耐えて強い。栗原良蔵という親友がいる。若くしてどんどん出世する。あまり出世するので、松陰はもう少し勉強する必要があるのでと説いてみる。これも目を通してみて欲しい。

(四) 敬愛の教育

家族にしても、学級にしてもよく言われることは愛、信である。今の日本で抜けているのは「敬」である。

仁渡戸稲造の「武士道(英文)」で、日本では宗教教育はやらないが、武士道が精神教育の中心的役割を担っている。奈良本辰也(大島郡出身、歴史家)が翻訳している。松陰の武教全書講録の武教小学序(小学・入門書の意)に松陰は武士道について述べている。

森信三著『修身教授録』では、敬はうやまうとつつしむとが一つになったものとしてある。美しさに対して「美し

いなあ」と感ずるはたらきが感性である。

(五) 感動の教育

佐藤一斎は「我れ自ら感じてしかる後人は是を感ず」といつている。先ず教師が感動しなければ子供は感動しない。

(六) 地域社会と学校

松陰が村塾を開く前には、久保塾と言つていた。村がよくなつていくようになければ村の塾の意味はないと言つてある。塾は地名を以つて名前があるように、地域を抱えていることを忘れてはならない。学校もしかりである。(「松下村塾記」)

「講孟余話」を読む

松風会理事 石原 啓司

一 「講孟余話」の成立について

「資料1」(全集三卷「解題」、撰集五〇(二八〇頁) 安政元年十月二十四日 野

山獄入獄(松陰二十五歳) 安政二年四月十二日(六月十日(孟子の講義))

安政六月十三日(十一月(孟子の輪読))

安政二年十二月十五日 藩

命により杉家幽閉

安政二年十二月十七日 講

義再開(父・兄・叔父が生徒) 安政三年六月十三日 修了

二 孟子とその時代

「資料2」(孟子序説―朱子集註) 趙岐「孟子題辞」参照

(一) 司馬遷(漢代)

(二) 韓愈(唐代)

(三) 二程子(程明道・程伊川)(北宋)

(四) 揚時(北宋)

(五) 朱子(北宋) 四書(大學・論語・孟子・中庸)

三 「孟子七篇」の内容 (二六一章)

(一) 梁惠王 上(七) 下

(二) 公孫丑 上(九) 下

(三) 滕文公 上(五) 下

(四) 梁惠王 上(七) 下

(五) 公孫丑 上(九) 下

(六) 滕文公 上(五) 下

(七) 王道論

(八) 王道論

(九) 王道論

(一〇) 王道論



(四) 離婁上(二八) 下(三)

(三) 王道論

(五) 万章上(九) 下(九)

王道論

(六) 告子上(二〇) 下(一)

性善説

(七) 尽心上(四六) 下(三)

(八) 至誠(聖道)

四 梁惠王(上) 第七章

「資料3」(王道政治論・仁政)

(一) 孟子の論旨

① 人は殺される牛の姿を見て、これを痛む心(本心)あり、この心を押して広げて人に対する同情心を持つのが仁政の法。

恩を推せばいつて四海を保んずるに足る

自分の父母を尊敬すると同じ心で他人の父母を尊敬

自分の子弟を可愛がると同じ心で他人の子弟も可愛がる

② この心を持ちながらも仁政を行えぬというの

「為さざるなり、能わざるにあらざるなり」

(二) 松陰の節記 仁政論

① 仁政五条(本文 参照)

② 民政と教育

五 万章(上) 第七章「資料4」

(一) 孟子

① 伊尹は「聖の任なる者」(責任感の強い聖人)である

② 聖人の行動は同じではないが共通点は「その身を潔くする」(私心をすてる)にあり

(二) 松陰

① 伊尹の行動を賞揚「伊尹の志を志し、顔淵の学を学ぶ」

② 伊尹の志を以って自ら信ぜば「知覚も亦自ら得る所あらん」

③ 「自ら潔くする」己を修める↓人格高潔とは私心をすてて仁の道に生きることを(参考) 論語 子路篇(二〇)

(士とはどんな人物か) 子貢問「いかなるか これを士人という」

子曰① 己れを行うに恥じ

あり② 宗族孝と称し、郷

弟と称す③ 言必ず信、行

必ず果 硜々然たる小人

なかな

子貢問「今の政に従う者は如何」

子曰「噫、斗簪の人 何ぞ

数うるに足らん」

防長の教育風土と

その形成と伝統

山口県立大学名誉教授

県教育会会長

松風会理事 河村 太市

はじめに

地域の教育力を構成する要素として、一つは自然条件、

二番目には県民の教育について

の意識、三番目に教育機関の完備があげられ、続いて文

化的要因として教育伝統の意識、地域における学習ボラン

ティアの状況があげられる。

人間について考えるとき

は、自然を考える必要がある。

内村鑑三も吉田松陰もそのことを述べている。

一 教育の基盤としての自然条件

(一) 県域内文化の均質性

昭和五十四年、NHKが「日本人の県民性」について

全国的に調査をした。その中で山口県は文化的に一つの広

がりをもつものであるとの指摘がある。それぞれの時代の

治世者たちによって防長二州を別々に治めたことはない。

しかし他県においては分割されて統治された歴史がある。そのため山口県は、方言にしても大体において県内同じである。このようなことから県内の文化が均質となつてい

る。教育風土としても同じである。

(二) 文化の交流を容易にした地形的特質

三坂圭治著『山口県の歴史』

では、山口県の地勢として河

川が多く、山地と海岸との交流が容易である。山脈が中国

山地の端で老年期で、あまり険しく高くない。奥の方まで

谷が発達し、山向こうの集落と行き来が容易である。文化

や物資の交流が容易である。

(三) 多様な文化の受容を可能にした地理的位置

三方が海で海路交通が発達している。大陸や海の回廊の

門戸である。

二 山口県民の教育意識

(一) 教育尊重の県民性

二番目に県人の教育意識と

して、教育を尊重する傾向がある。県民の意識調査でも教育への関心・学歴志向が高い。

末川博著『彼の歩んだ道』

(岩波新書・昭和四十) 彼は

玖珂町に生まれ、岩国中学校から第三高等学校へ進学。

「…維新後、百姓の子でも能力があれば立身することができ

るようになったとか、その他いろいろの理由が考えられるのだが、要するに、長いあいだ抑圧されてきた人たちが、希望を未来にかけて、子弟の立身出世のために教育に

力を入れたのであろう。」と。

山や田んぼを売ってまでも子供を中学校や高等学校へ進学させた。明治以後には学歴と職歴が連動するようになった。無理をしても子供を教育

するようになった。

竹内洋著『学歴貴族の栄光と挫折』(日本の近代一一、中央公論社、平成十一)、山口高等商業学校沿革史』では、高等教育の様子をうかがうことができる。

岩手県出身で東京大学を出られ内務省の役人をした後、山口県都濃郡の郡長(昔は郡が行政区)をされた田子一民

著『郡に在りし頃』(大正三三)では、「…この希望を抱き、過去三年間における余の山口

県で実見したところに徴すれ



ば、山口県の富豪の自覚し覚醒して民心の指導啓発に金を少しも惜しまぬ態度は実に範を天下に垂れているものと深く感ずるのである。勿論ここに富豪というのは中央枢要の位置にいらる元老や、その他の方々を指すのではなく、実際県内に居住し県民となり郡民となり、市長村民となっ

ていらるる人を言うのである。今山口県の富豪が地方民心改良の為に尽す類例を広く山口県下に徴せずとも、余の在職する本郡(都濃郡)内の最近の事実を照らしてみても、いかに山口県の富豪は、民衆社会の為に尽力するかが分かる。」と。

これがどの程度信頼できるかは別として、教育に民衆が力を入れるようになったこと、教育は受益を受けるものが負担する、いわゆる受益者負担が原則であることが常識であった。

明治五年の「学制」にしてもそのことが伺える。市町村は今より小規模で財政難であった。それでも全国を八大学区、三二の中学校区、一つの中学校区に二一〇の小学校をつくることゝがすすめられた。これも受益者負担で市町村は大変であった。

最初は空家とか寺院などを

学校とした。当時は四年の義務教育であった。次に小学校の義務教育年限が六年となった。当時は子どもは大切な労働力であり、年限が二年増えると言うのは家庭にとつて大変なことであった。

義務教育就学率のグラフをみると、最初は三八パーセント程度で、就学率は明治二十年ごろに八〇パーセントを越えた。明治四十年頃には大体一〇〇パーセントになった。しかし、実質では長期欠席などもあった。この教育の振興が産業の質を高めることとなった。

昭和二十二年に義務教育年限が九年となり三年延びた。このときも自分たちのムラの子供の教育を考えて学校づくりをしてきた。

現在は行政が力をそそぐようになり、何でも行政の力に頼るようになってきた。このことが地域の教育力を低下させることにもなっている。

田子一民はさらに「小学校を中心とする地方改造」ということを言っている。当時学校は地域にとつて大きな中心的文化施設であった。

(二) 修学・進学 の状況

外山一正著『藩閥の将来』

(明治三二) 図表「高等中学

校の設置区域」を見ると、全国を五区に分け、山口県は第三区となつてゐる。これは国立の学校である。山口県は県で独自に山口中学校をつくつたが、高等中学校へ行く場合は京都まで行かねばならなかった。そこで元藩主たちの連盟でお金を出し合つて「防長教育会」をつくつた。

明治十七年当時、旧藩主毛利元徳は、外務大臣だった井上馨が愛媛県に視察にいくことを知り、山口県にもついで足を運んで教育事情を調べてくるよう依頼した。井上馨は視察をし、山口県の中等教育は遅れている旨報告した。

明治十九年、学校令と同時に「学校をつくるだけの資金を準備しその運営管理を国や都道府県などへ委託するならば



くつてもよい。」となつてゐた。

第三高等学校をつくるのに当時のお金で十六万円くらい準備する必要があったが山口県では既に何十万というお金を集めていた。元藩主たちのお金を中心に基金とし、国立の山口高等学校がつくられた。

当時の学校制度は、尋常小学校から四年間中学校(山口・萩・豊浦・徳山・岩国)へ、次に山口高等学校へ五年間、更に大学となつてゐた。この五中学校を卒業すれば無試験で高等学校へ入学することができた。ところが明治二十七年に高等中学校が高等学校へ移行してから、高等学校や大学への進学者が増えてきた。そのため明治三十年、帝国大学をつくり、全国一斉に試験をするようになり、山口高等学校では、県内の子弟より他県からの学生が増え、そもそも山口県の子弟のためにお金を出して運営していることに疑問が出てきたため、

明治三十七年やめることとなった。そのころ実用専門学校

の必要性がでており、高等学校をやめ高等商業学校をつくることになった。

(三) 生涯学習への志向
 玉木吉保著「身自鏡(みの

かがみ)」著者は十三歳のときにお寺に入る。下山して次々と勉強を続け、先ず連歌を習得し、次に料理の免許を取る、五十歳で医学をはじめでなく生涯にわたり実によく勉強している。

県教育会の機関紙に「大島郡沖家室外入」の「老婆学級」が掲載された。大島は出稼ぎの島で、島を離れた人から手紙がくることが多い。しかし、当時手紙が読めない、返事が書けない島民が多かった。明治三十七年、教師やお寺の住職などが中心になり「老婆学級」を開設し、読み書きをできるように指導した。皆熱心に取り組み、三、四年でかなりの力をつけてきた。社会教育は学習者のニーズをとらえることが大切である。

三 教育機関の整備普及状況
 (一) 学校教育
 山口県事典(県教育会出版)によると、郷校は全国一八〇のうち山口県一九で一位、私塾が全国一一四〇のうち山口県が一〇五で岡山、長野、東京について四位、寺子屋が全国一五五四のうち山口県一三〇七で長野について二位となつてゐる。しかし、この数は必ずしも正確ではないと考

える。

寺子屋の経営者・師匠をみると武士が全体の四〇パーセントで最も多い。

寺子屋・私塾は文字を覚えたい、そろばんをやりたいという要望と無縁ではない。貨幣経済中心の世の中に移り変わってきたこととかかわりがあり、山間部より瀬戸内側が多いといえる。

藩政時代の教育政策の特色として、先ず教育の目的からは国民意識の醸成、人材登用教育、実学の尊重があげられる。また明倫館への学制の統轄、教育対象の拡大(武士から庶民まで)、洋学の振興が行われた。

近代になり、各県の特色が失われて、全国共通の教育が行われるようになった。

(二) 社会教育

石田梅岩が始めた「石門心学」では町人・農民のための学問が組織された。天保四年に長州がこれを採用した。この頃、庶民が行政にはむかう現れとして天保一揆が起こった。一揆収拾の後、村々の住民を教育する必要が出てきた。島根県の浜田では、この「心学」により民衆掌握に成功した例がある。

当時は、行政区を宰判として区分していた。各宰判ごとに基金(心学修補)をつくら

せた。宰判内の裕福な家から寄附を募り、藩もそれにお金を出す。こうして全藩内の宰判に修補をつくった。この内容については、四十年くらい前に編集した「心学修補一件」(山口県文書館)に詳しくまとめられている。その基金は、心学の指導者の謝金などに活用された。

全国的に心学を研究した資料を見ると長州は群を抜いている。基金を作るのに、指導的な立場にいた人をはじめ教育を受ける人は自ら負担をした。受益者負担であった。長州藩での集団による受益者負担はこの心学修補が最初であろう。

これを戦前で言えば、二宮尊徳の「報徳会」「教化総動員運動」「経済厚生運動」「大政翼賛会」へ、戦後の新生運動などへとつながるものであった。報徳会は実践的な会で一月に一度集まって報告をするとか申し合わせをしたりしていた。今日の地域活動と同じである。

四 文化的雰囲気

滝鶴台(一七〇九〜一七七三)は萩の出身であるが右田毛利の家臣となり時観園の指導者であった。その後江戸へ出、江戸では詩文関係でもっぱら江戸一番と言われた。

藩主毛利重就は彼を藩へ取り立て、朝鮮使節の通訳(漢文でやり取りをする)などをやらせている。朝鮮通信使とのやり取りを記録した「長門癸甲問槎」に彼の優れた面が指摘されている。この中で「その国 おのおのその国の道ありて 国治まり民安らかなり」と述べている。

五 優れた先人の輩出

滝の奥さんは素晴らしい方で、明治三十七年から終戦前まで国定教科書五期のうち四期にわたり修身の教科書に出ている。それは「赤いまりと白いまり」で自分がよいことを行えば白い糸を巻く、あまりよくなかったときには、赤い糸を巻く。白いまりが大きくなるためにはよいことを多くしなければならぬと言っている。

山口県で戦前の修身の国定教科書に出てくるのが「吉田松陰」「滝鶴台の妻(よき習慣をつける)」「毛利元就(三本の槍)」「吉田松陰の母」「乃木希典」「杉百合之助」「高杉晋作」などであった。山口県は優れた人材を輩出している。

六 教育伝統の意識

大正三年、山口県知事として着任した、赤星典太氏は「山口県は教育県だと聞いて

きたが、たいしたことはない。これから教育県にしていかななくてはならない」と。

小川五郎著『防長教育精神の源流(昭和十二年)』では、「職員給与等の待遇、施設設備など他県と比較して教育県と自慢できることはない。ただ、教育の精神が根幹であり、このことが教育県であること」

おわりに
今後は「教育県山口」から「学習県山口」という体制で進むべきだと考えている。



氏名	五十音順
加 者	豊北第三中
麻野 和男	豊北第三中
麻野 幸子	県立聾学校
岩崎 稔生	中村女子高
岡崎 範夫	四熊小学校
兼重華都子	佐山小学校
新谷劍二郎	大内南小学校
水津 英三	福川小学校
田村 洋幸	岩国教育事務所
椿 義憲	萩市立明倫小
土井 浩	宇部高等学校
豊岡 彰子	末武中学校
中川 栄治	八坂小学校
中嶋 豊子	鑄銭司小学校
橋本 均	御庄中学校
橋本 展宏	富田西小学校
濱岡 正彦	川中小学校
福井 貴己	野島中学校
福本 紘子	王司小学校
藤本 正明	山口市
松谷 良子	山口市
三原 幸光	秋穂中学校
山崎 志郎	塩田小学校
吉田栄次郎	長門高等学校
吉村 洋一	彦島中学校

平成十三年度松陰研修塾

基礎コース二年次の予定

第一回 平成十三年六月九日

(土)

第二回 平成十三年八月二十

五(土)・二十六日(日)

第三回 平成十四年一月二十

六日(土) 閉講行事

21世紀の新しい歌ができる

二十一世紀を拓く

～松風会に寄せる歌～

作詞 大田恭次
作曲 北島哲郎

Moderate *mf*



1 あたらしいよのーれいめいが げきどうのそら



しゅにそめて あいとせーを よびおこ



す ああ やまーたかく かわながー



く くにのさかえをいのるごとくに

二十一世紀を拓く

～松風会に寄せる歌～

作詞 大田恭次
作曲 北島哲郎

一 新しい代の 黎明が

激動の空 朱に染めて

愛と至誠を 呼び起こす

ああ山高く 河長く

国の栄えを 祈るごとくに

二 平和を築き 日本の

豊な心 育てよと

父祖の教えが 友を呼ぶ

ああ「今の世を 救はむ」と

使命受け継ぐ 松門われら

三 幕末維新 胎動の

精魂今に よみがえり

青雲の志気 燃えたぎる

いざ奏でよう 松風下

命きらめく 世紀の歌を

(吟) 萩に来て

ふと思へらく今の世を

救はむと起つ松陰は誰

吉井 勇

作詞 大田恭次 前山口県教育会会長・松風会理事
作曲 北島哲郎 松風会理事長松永祥甫孫(娘長男)

東京大学教養学部理科Ⅱ類在学中

松陰の手紙が発見される

松陰の手紙が発見される

平成十二年十二月二十日、美東町大田の宮川智氏所蔵の吉田松陰書簡が美東町教育委員会を通して公開された。

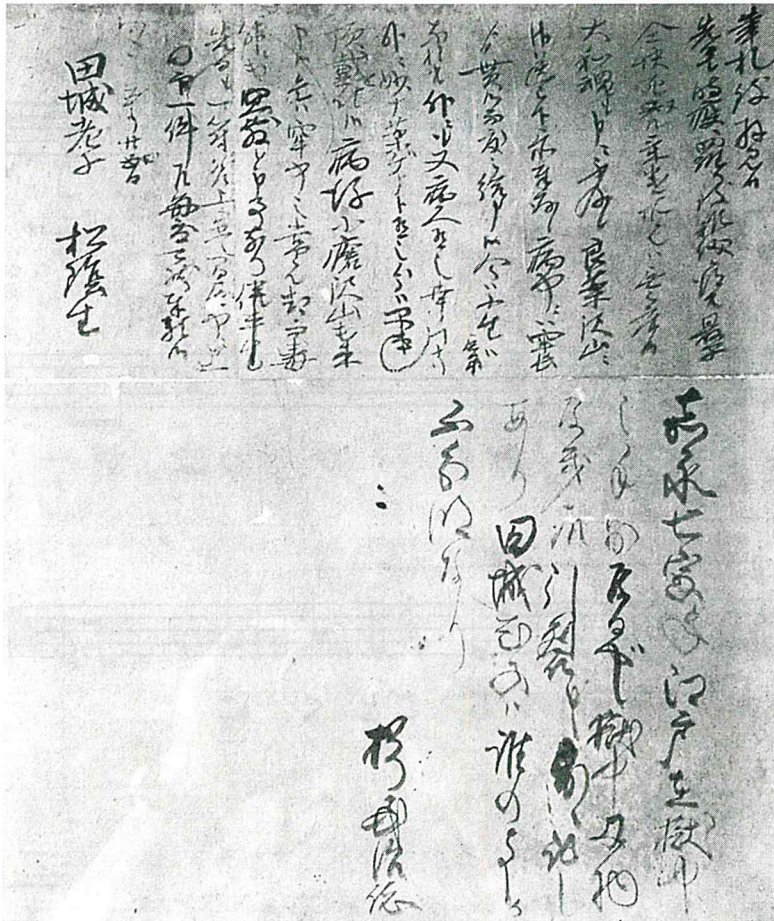
嘉永七年(一八五四)三月二十七日、吉田松陰は金子重之助と共に海外渡航に失敗し、自首し、四月十五日に江戸伝馬町の獄舎に入れられる。

この書簡は、五月二十四日獄中から松陰が親友の宮部鼎蔵(田城は宮部の号、老子は老師)にだしたものである。内容は薬のお礼と○印(お金)のお願いである。

松陰の手紙文

筆札致拜見候
先日者時疫二罹り致難儀候得共最早
全快死ヌル氣遣候二てハ無御座候
大和魂と申二不及候良葉沢山ニ
御送被下忝奉存候病中ニハ牢長
より貰候て度々給申候今ハ小生ハ無用

なれども外二も又病人有之幸ノ事ナリ
外ニ妙ナ葉ゲート有之分ハ早速
頂戴仕候病後小瘡沢山出来申候是ハ牢中之常ニて却て毒外ニ出宜敷と申事ナリ
先日も一符差上置候間中に申上



○印一件毎度可然奉願候
五月廿四日
田城老子
松陰生

嘉永七年寅年江戸在獄中之手番なるべし獄中刃物なき故引裂申し候番に記しあり田城老子ハ誰の事か
不明なり
杉民治誌

書簡の現代語訳

先日から、やはり病にかかって困っていましたが、もはや全快しましたのでご安心ください。大和魂で死ぬ覚悟をしましたが、それには至りませんでした。よい薬を沢山送っていただき感謝しています。今は、私も薬は必要がなくなりましたが、牢内では、ほかに

もこの病に罹っている者もおり助かりました。ほかにゲートという妙な薬がありました。後で出来たてきものに使わせてもらいました。このできものは牢内ではよくできる病気で、薬は毒を体外に出すのに役立つたようです。ところで、前の手紙に書きましたように、毎度ながら○印(お金のことか)の件についてよろしくお願いいたします。

松風会役職員一覧

役職名	氏名
理事長	松永 祥甫
理事	二木 秀夫
理事	大田 恭次
理事	谷口 不二彦
理事	岩本 肇
理事	河村 太市
理事	石原 啓司
理事	濱本 研一
理事	吉村 洋輔
理事	岡本 早智子
理事	陶山 長
監事	原田 寿男
監事	西本 正彦
事務局長	室 謙司